優秀賞

大阪府　貝塚遊技業組合
「市内小・中学校に対する図書寄贈」事業

貝塚遊技業組合 組合長
金森浩年さん

子どものうちに読書の楽しみを発見すること　とが豊かな心を育てる

本という知的遺産を子どもたちに

子どもたちの活字離れが進んでいると耳にすることが多いが、どうも実態は異なるようである。全国学校図書館協議会と毎日新聞社が毎年実施している学校読書調査のデータによれば、2009年5月の1ヵ月間で、小学生は8.6冊、中学生3.7冊、高校生1.7冊の本を読んでいるという。読んだ本の平均冊数は、小中高のいずれも10年前を上回っている。このデータを見る限り、児童・生徒の間では読書離れや活字離れは少なくとも起きていないということになる。また、小学生の8割、中高生でも7割以上が本を読むことを「好き」と答えているが、子どもたちの本好きの背景には、たとえば全国の多くの学校で実施している「朝の読書（あさどく）」の影響などもあるのではないだろうか。

さて、子どもたちが本に身近に触れるところといえば、やはり学校の教室や図書館だろう。そこを少しずつでも充実させていくことは読書への興味喚起になるし、それがひいては言語力、読解力の向上につながる。さらにその先には、読書によって育まれる豊かな情操をベースとした優しい社会の実現が待ち受けているだろう。それこそが本という知的遺産の究極の存在意義である。

市内の小中学校に図書を寄贈し続ける

大阪府貝塚遊技業組合では、青少年の健全育成を目的に、貝塚市内にある15校の小中学校（小学校10校・中学校5校）のすべてに図書を寄贈する活動を7年にわたって継続して行っている。これは毎年、50万円を図書購入費として寄贈するものだが、実際に図書の選定や購入、配布は、この事業の共同実施団体である貝塚市教育委員会学事課が担当している。

教科書で取り上げる内容なども以前とは大きく異なり、子どもたちの興味や関心も多様になってきている。そのような状況の中で、いまの子どもたちに必要とされる本を見極めることは相当難しい。そこは専門家である教育委員会などの関係者に任せたほうが、現場が必要とする本を選ぶことができる。図書贈呈という社会貢献活動を有効なものにするためにも、専門家に協力を求めることは実効性がある。

平成15年度からの継続的な実施によって、これまで総計1,565冊（350万円相当）の図書を寄贈・配分したが、子どもたちにとっては、その本を読んだことが学校時代の貴重な思い出の一つになるに違いない。また、たまたま手にした1冊が、その後の人生の指針となったり、将来を考えるきっかけとなることも大いにありうるし、そこで身につけた読書の習慣が、一生続く可能性もある。それが本の持つ無形の力といえるだろう。

この図書寄贈事業に対して、貝塚市長から感謝状を授与されたほか、協力機関の貝塚市教育委員会学事課によれば、さまざまな「作文コンクール」での入賞が増えてきているとのこと。そうしたことから、組合の図書贈呈事業は父兄にも好評だという。作文力は、結局、どれだけ本を読んでいるかに関係してくるだけに、その意味でもこの事業が大きく寄与しているといえるだろう。

貝塚遊技業組合では、図書だけでなく、それを収める書架も贈ったほか、平成15年度と16年度には、すべての小中学校に車椅子も寄贈している。

平成21年度は市内の小中学校に計305冊を寄贈した

貝塚市 市長に目録を贈呈する様子